



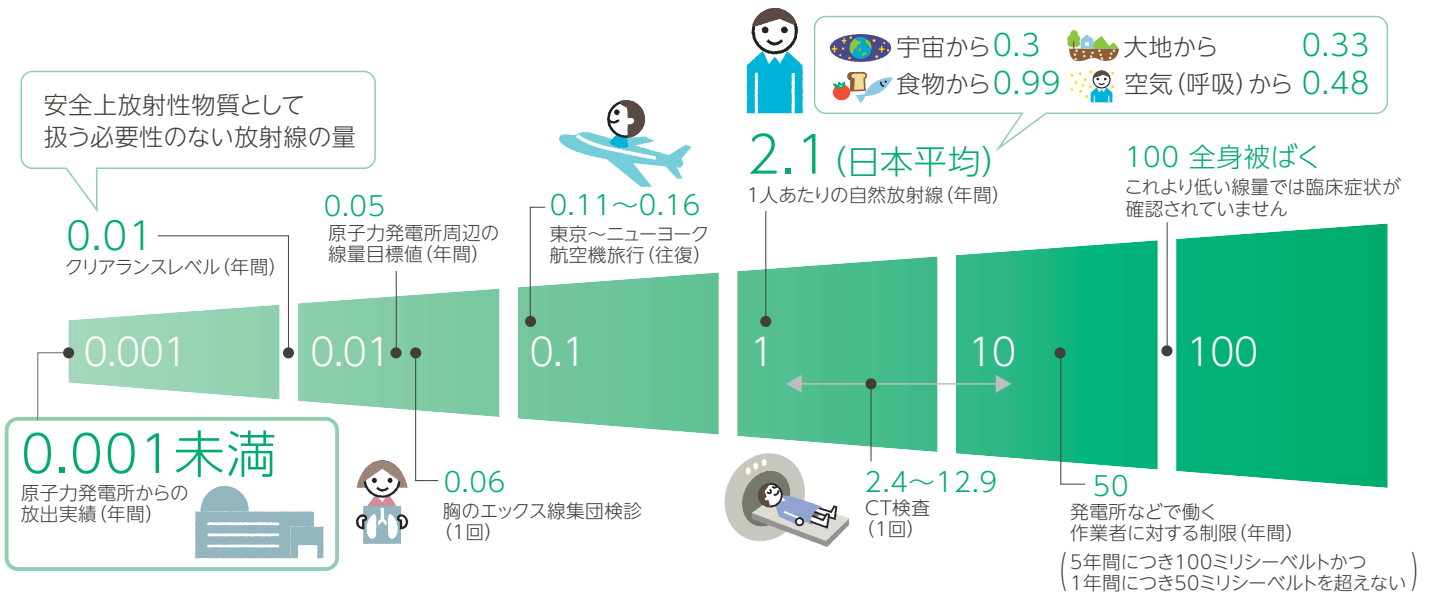
# 原子力発電所では、発電所周辺への放射線量の管理を徹底しています

原子力発電所から放出される年間の放射線量は、

## 自然界から受ける放射線量の

# 2,000分の1以下です。

【日常生活と放射線の量】(単位:ミリシーベルト)



出典:電気事業連合会「放射線Q&A」、UNSCEAR 2008 report ほかをもとに作成

## ■ がんになるリスクの比較(放射線量と生活習慣)

放射線の被ばく線量が100~200ミリシーベルトあたりから、被ばく線量の増加に従い、発がんするリスクが増加します。

100ミリシーベルト以下では、放射線による発がんリスクの明らかな増加を証明することが難しい、ということが国際的な認識です。

放射線の線量(短時間1回) <sup>※1</sup>	がんの相対リスク(倍)		生活習慣因子 <sup>※2</sup>
1,000~2,000 ミリシーベルト	1.8	1.6	喫煙 飲酒(毎日3合以上)
500~1,000 ミリシーベルト	1.4	1.29 1.22	やせ過ぎ 太り過ぎ
200~ 500 ミリシーベルト	1.19	1.15~1.19 1.11~1.15	運動不足 塩分の摂り過ぎ
100~ 200 ミリシーベルト	1.08	1.06	野菜不足
100 ミリシーベルト以下	検出不可能		

出典:国立がん研究センター、政府関係省庁「放射線リスクに関する基礎的情報」をもとに作成

※1 広島・長崎の原爆被ばく者の疫学調査

※2 成人(40~69歳)を対象としたアンケート調査



## 使い終わった燃料は、どうなるの?

詳しくは裏面へ

使い終わった燃料は、再処理して、  
ウランやプルトニウムを取り出し、燃料として利用することにしています。  
その過程で発生する高レベル放射性廃棄物は、何重ものバリアを施し、  
地下深い地層に安全に処分されることになっています。

## ■ 放射性物質を閉じ込める多重のバリア

日本では、再処理の過程で生じる高レベル放射性廃液を、溶かしたガラスと混ぜ合わせて安定した形態(ガラス固化)にし、地下300m以上の深い地層に処分することを基本方針としています。

国内での長年の研究により、地層処分を実現できる技術的な目途はついていないことなどが確認されており、国際的にも、技術的に最も有望な方法として、諸外国で取組みが進められています。

現在、国も前面に立ち、今後の地層処分の実現に向けたさまざまな取組みが行われており、国内処分の実現に向けた一歩として、2016年中には、より適性の高い地域を科学的有望地として提示することを目指しています。

